

宝の海から

白浜で出会った生きものの宝

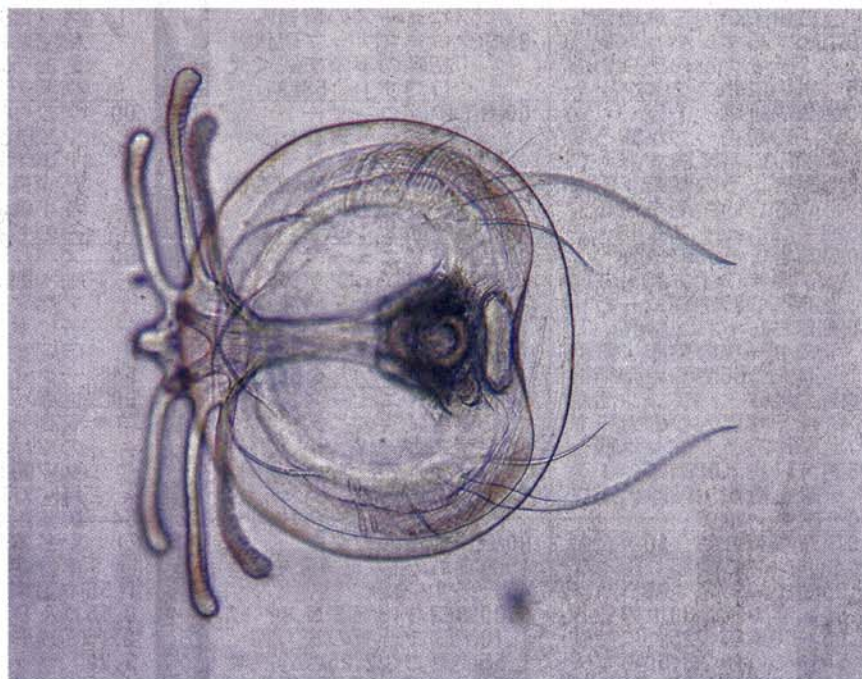
49

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

カイヤドリヒドラクラゲ 瀬戸内で初出現

今年9月下旬、愛媛県松山市三津浜港で、カイヤドリヒドラクラゲの成熟クラゲと幼生時代のポリプを初めて確認した。長年の調査から、三津浜港へカイヤドリヒドラクラゲが住むようになったのは、ごく最近のことであると思われる。第6回で示したように、田辺湾では日本でもっとも高い共生率。

今年9月下旬、愛媛県松山市三津浜港で、カイヤドリヒドラクラゲの成熟クラゲと幼生時代のポリプを初めて確認した。長年の調査から、三津浜港へカイヤドリヒドラクラゲが住むようになったのは、ごく最近のことであると思われる。第6回で示したように、田辺湾では日本でもっとも高い共生率。



二枚貝に似たシャミセンガイの幼生。貝殻の直径は0.6mm

可能性もある。しかし、確実に地球温暖化が進行しているっており、水温上昇と本種の出現と定着の関係が十分ありうるもので、今後の研究が必要である。

今回の調査で珍しいシャミセンガイの幼生も確認できた。貝のようだが、幼生の時からもう2枚の貝殻をもっている。貝類のベリジャー幼生とは違って、チョウの羽のような面盤をもたない。そのかわりに、繊毛の生えた8本の触手を動かして滑るように遊泳していた。刺激すると、触手を収縮させて容器の底へ沈み、2枚の貝殻をすり合わせるような行動をしきりにした。この二枚貝のような幼生は、やがて海底に降りて、茎のような柄を伸ばして砂泥中に潜るシャミセンガイへと変態していくのである。

地球温暖化の申し子か？

三津浜港でフェリー乗り場すぐそばの外国船のついで港の岸壁で、プラシトネットを歩きながら表面をひいたり、水深7mの海底から海面まで垂直にひいたりしてみると、カイヤドリヒドラクラゲの成熟クラゲが立ち続けに捕れた。一方、港の浮き桟橋に結ばれている鉄の鎖とプラサキイガイを生きたの

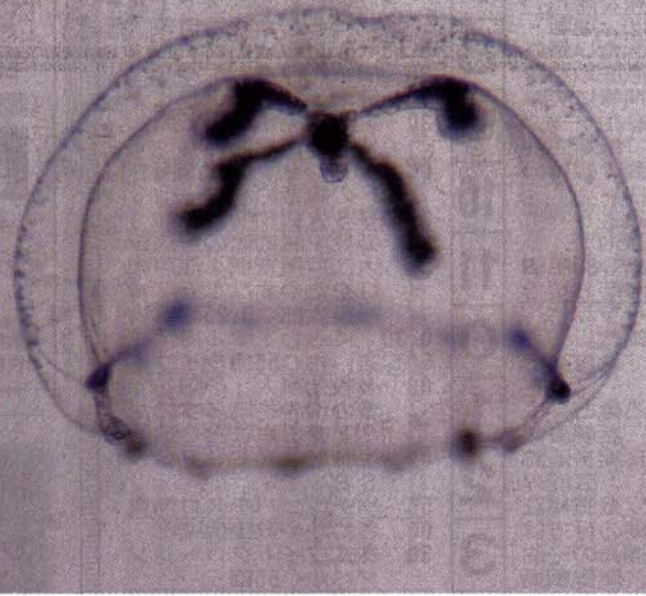


の浦、大島郡久賀、山口市秋穂長浜でもカイヤドリヒドラクラゲは採集された。著者が1979年に三津浜港のムラサキイガイと共生するコノハクラゲを初めて発見して以来、93年と98年に今回の発見場所と同地点とそより約1km離れた三津浜港の別の地点で、ムラサキイガイ、マガキ、カリガネ、エガイ、イガイ、ムラサキイガイ、イガイ、ムラサキイガイの沿岸から流されてきた

「生きた化石」であるシャミセンガイの数があちこちで減少していることを耳にする。田辺湾でも半世紀以上に捕獲され、標本も残っていないが、今は見る影もない瀬戸内海でも絶滅しないことを願う。



発達途上のクラゲ芽を1個形成したカイヤドリヒドラクラゲのポリプ。体長は約1mm



瀬戸内海に今年初めて出現したカイヤドリヒドラクラゲのクラゲ。直径は約0.8mm